

卒業式式辞

この春に、社会人として広く世界に飛び立つ卒業生、大学院修了生の皆さん、また、これから何年間か、さらなる学究の意欲に燃えて進学の道に入られる皆さん、それぞれの旅立ちにあたり、一言、お祝いとはなむけの言葉を述べさせていただきます。

私たちは今、グローバル時代の名の下に人類がかつて経験したことのない状況を生きています。「超スマート社会、ソサエティ5.0」など新しい名称に象徴されるビッグデータとAIの時代、弱肉強食の論理が正義とみなされる恐ろしい二極化の時代、さらには、溢れかえる情報を隠れ蓑に、嘘が嘘を増幅させるポスト真実時代。私には、世界が幾重にも引き裂かれているような気がしてなりません。

昨年末、私は、アメリカの東海岸を訪ね、ニューヨークから独立戦争時代の逸話で知られるフィラデルフィアにまで足を伸ばしました。そこで思いがけぬ事実に遭遇しました。フィラデルフィアは、人口百六十万強、名古屋市よりも八十万強、福岡市とほぼ同規模の、アメリカ第五の都市、名門ペンシルヴァニア大学を擁する学術都市としても知られています。ところがそのフィラデルフィアが、じつは貧困ライン以下の暮らしを強いられている市民が二十パーセント近くを占める、まさに二極化のシンボルのような都市でもあるのです。市内を流れるデラウェア川にかかる橋をわたると、そこはアメリカでも有数の危険地域であると教えられました。

そんな複雑な成り立ちをもつ伝統の町フィラデルフィアを歩きながら、私はある突飛な連想にかられていました。グローバル時代の二極化というのは、ことによると私たちが現に生きている人生の一つのメタファー、隠喩そのものなのかもしれない。と。グローバル時代とは一つ選択を間違えると破局的な状況に追い込まれる可能性をはらむきわめて危険な時代です。ちよとした油断で個人の情報やプライバシーはどこん外部に晒され、小さな規律違反が取り返しのつかないリスクをコミュニティ全体にもたらします。そして、平和的共生という美しい理想の傍には、どう猛なエゴイズムを隠し持った人間、自分さえよければ、他人がどう傷つこうと構わないと考える人々が信じられないほど数多く存在します。

では、こうした状況のなかで、どのように自分の人生を守り、それをクリエーティブな生き方に結びつけていくのか。

最近、私がモットーとしている諺の一つに、「急がば、回れ」(Walk, Don't run)があります。皆さんの耳には、きつと、とても保守的で、説教じみた処世訓のように響くかもしれません。私としても、本来的に、「若者よ、大志を抱け」(Boys, be ambitious)と力強く叫びたいところですが、今のこの状況にあつて、私の口からとてもそうした勇氣ある一言は出てきません。むしろ、「大志」(ambition)を抱くことなしに、魅力ある人生を送ることは困難です。「大志」があつてこそ、新しい可能性も生まれます。でも、「大志」の実現にわれを忘れるほどに熱中してほしくない、という思いが私のどこかにあるのです。なぜなら熱中とは、人間がもつとも無防備になる瞬間であり、しばしば大きな不幸を呼び寄せる危険があるからです。「大志」を実現するには、逆に、熱中の傍につねに自分を冷静に見つめ続けるまなざしが不可欠です。

今年の平昌オリンピックを観戦しながら、一つ大いに勇氣付けられたことがありました。羽生結弦選手の活躍でした。彼は、最後の何カ月間か、世界から意識的に自分を隔離し、それによつて四年に一度のビッグチャンスをものにしました。ソチオリンピックでの金メダルは、ライバルのミスに助けられた側面もありました。そして真の金メダルを獲得しようとして、彼が積みあげた四年間の努力で得た最大の力とは、冷静さです。大いなる熱中と背中合わせにある冷静さ、自分を見つめる力です。では、それをどうやって手に入れたのか。むしろ、孤立からです。人が、大きなチャンスを手にするには、人と同調し続けているだけでは、だめなのです。ひそかに目標を定め、急がずに、ゆつくり、歩く。私は、皆さん一人ひとりに、人生の金メダルをとつてほしいと願っています。そのためには、孤立を恐れない勇氣が必要です。そして孤立とは、まさに「Walk, Don't run」の遠回りの思想なのです。グローバル時代は、たしかに、小さなミスが、恐ろしい規模に一気に増大する危険いっばいの時代かもしれません。しかし、遠回りを恐れず、地道に努力を重ねれば、いくらでもやり直しがきくのが、この時代の特徴でもあるのです。しかもうれしいことに、皆さんは、「人生百年の時代」を生きている。

でも、むしろ、金メダルが人生のすべてではありません。

こうで、アメリカ大陸の発見者クリストファー・コロンブスにまつわる印象深い一行を引用します。

Oh, you may be sure that Columbus was happy not when he had discovered America, but when he was discovering it.It wasn't the New World that mattered, even if it had fallen to pieces. Columbus died almost without seeing the everlasting and perpetual process, not the discovery itself, at all. (F.M. Dostoevsky)

「そう、あのコロンブスが幸福を感じたのは、アメリカを発見したときではなく、アメリカを探し求めていたときでした。……新世界などへつに問題ではありませんでした。そんなものは消えてなくなつてもよかったです。何しろ、コロンブス自身、ろくに新世界を見る暇さえなく、そもそも自分がいったい何を発見したかも知らずに、死んでいったのですから。大事なのは、生きることなのです。ひたすら生きていくことつまりたえず、果てしなく生命の可能性を追求していくことなのであつて、発見なんかなくたっていいのです！」

かりにこのひと言を当てはめるなら、羽生選手は、その最高の幸せを、オリンピック競技開始二日前に経験していたということができるといってもいいかもしれません。いずれにせよ結果がすべてではない、ということなのです。ただ、人情として、結果はやはり必要です。結果なしで私たちは生きることができません。コロンブス自身、今日、多文化主義と呼ばれる観点からはしばしば「侵略者」のレッテルが貼られることが少なくない冒険家ですが、ともかくにも、たいへんな労苦の末に、アメリカ大陸の発見者となりました。私がここで申し上げたいのは、最高の結果とは、目標に到達しようというたんにがむしゃらな思いだけで得られるものではないということ、むしろ、孤立を恐れず、とんとん冷静さを心がける余裕にこそその可能性は宿る、ということなのです。

「歩け、走るな(Walk, Don't run)」に込めた私の思いとはそのようなものです。

最後にひと言、皆さんが今日別れを告げる私たちの名古屋外国語大学は、今年創立三十周年という記念すべき年を迎えます。三十にして立つ、という格言を存知でしょう。もはや私たちに甘えは許されません。しかし、大学の「而立」は、まさに皆さんの活躍一つひとつにかかっているのです。皆さんの充実した人生と活躍こそが、私たちの大学の歴史を作り、その基礎を固めていく。どうか、名古屋外国語大学に「学んだ」、そして「卒業した」という誇りを、いつまでも胸に秘め、その自覚をもつて生きていってほしいと思います。そして私たち教職員一同も、皆さんが、この大学で学んでよかった、卒業できてよかった、と一生思っていただけ大学であり続けるよう、限りなく努力を積み重ねていく心づもりです。

最後になりましたが、何より、皆さん一人ひとりの健康と成功、幸多き未来を祈つて、学長の式辞とします。

二〇一八年三月二十二日

名古屋外国語大学長

亀山

郁夫